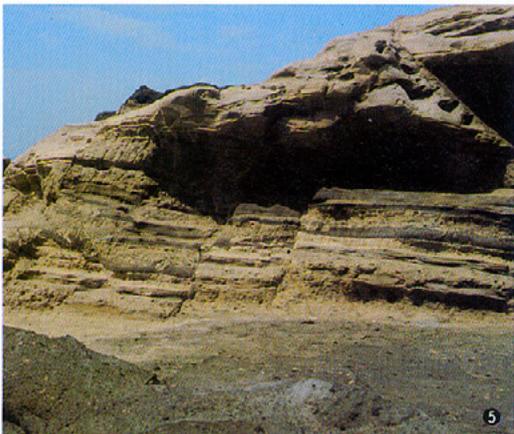
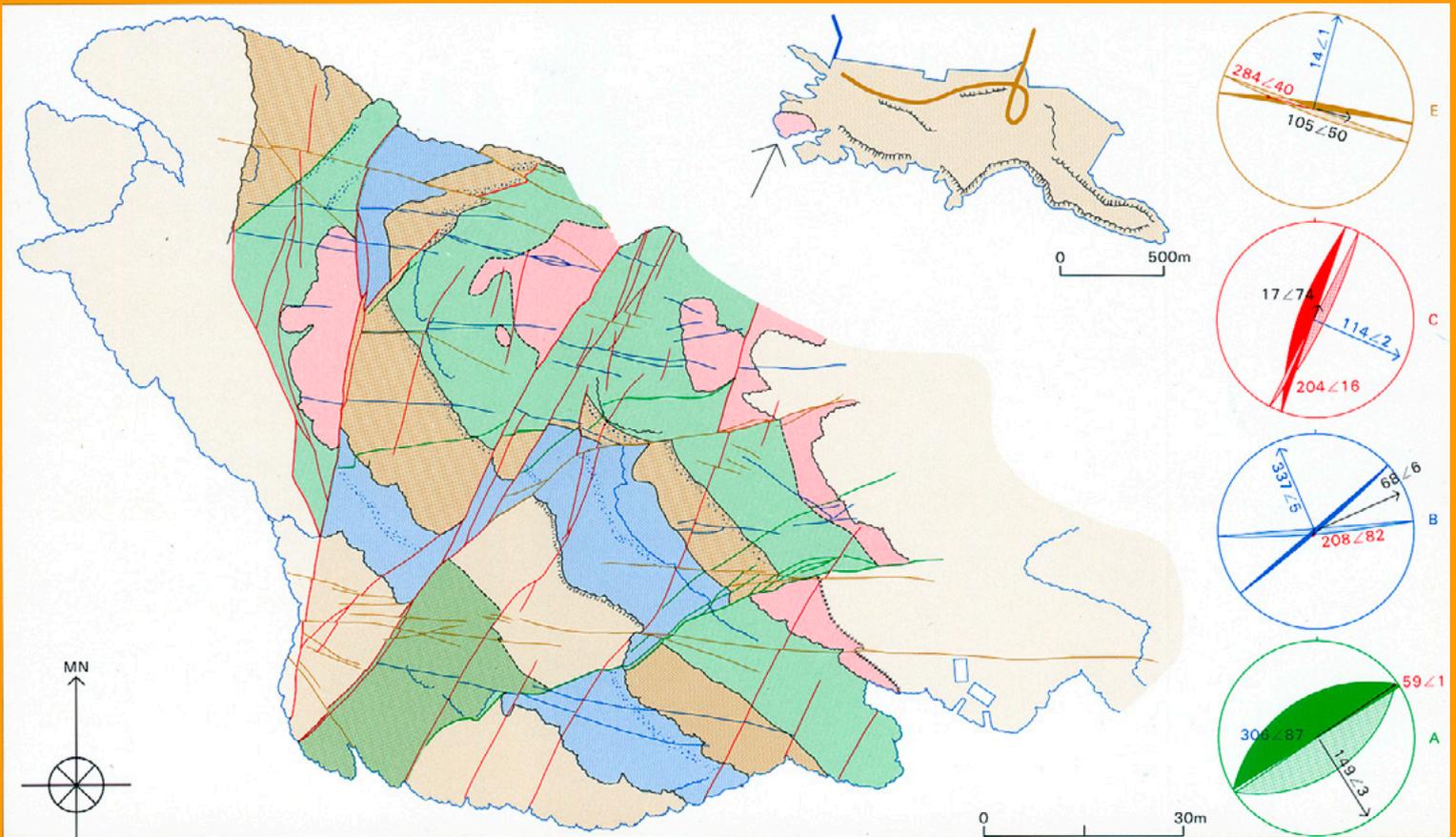


城ヶ島西端の小断層系

小玉喜三郎 = 工業技術院地質調査所





城ヶ島西端の小断層系

関東平野を中心とした造盆地運動の結果、南関東地域、すなわち房総半島や三浦半島は、鮮新世以後現在に至るまで、相対的に隆起を続けてきた。このような隆起運動を反映するように、この地域には、大小さまざまな断層が発達している。最も基本的な断層は、両半島を胴切りにする東西性の断層で、中新世末の三浦層群堆積当時から最近に至るまで、くり返し活動している。房総半島や東京湾ののびの方向と平行する南北性の断層も、鮮新世末期から更新世前期、同後期にかけて、くり返し発達している。このように南関東の隆起運動を背景に、南北性・東西性の断層が相前後して、くり返し発生してき

た。比較的ズレの量が小さい小断層は、それぞれの時期の断層活動を化石化しているので、時代順に断層系統を区別すると、地殻変形の過程がさらに具体的に明らかにされる。下表は、三浦半島南端部における小断層系の性質をまとめたもので、この地域には、更新世前期末の長沼変動期以後、下表にみるようにA～Eまでの合計5つの断層系が発達している。上図は、城ヶ島西端の平らな海食台でスケッチした断層の分布図である。下表のD系統を除く4つの断層系が、それぞれ古い系統の断層を切断して順々に発達してくる様子が示されている（地層は中新世～鮮新世の三浦層群）。右上の円グラフは、

各断層系について求めた造構応力の向きを示している（下半球ステレオ投影）。青色軸は主張力、黒色軸は主圧力、赤色軸は中間主応力、の方向と水平面からの伏角を示している。写真 = 三浦半島南端部全景。下方にみえるのが城ヶ島で、上図の位置はその左端にあたる。写真 = この地域で最も古期のA系統の逆断層。写真 = B系統で断層面が固結している。写真 = C系統の南北性正断層。写真 = E系統の東西性正断層・走向移動断層でこの地域で最も新期の断層系統。

三浦半島南部の小断層系

時代	系	断層面の走向・傾斜	変位形式	主応力軸の方向		平均剪断面角	断層面の性質	断層の分布	地殻変動
				主張力軸	主圧力軸				
後武蔵野変動期	E	NW-SE, E-W 急傾斜～垂直	傾斜移動・走向移動	NNW-SSW 水平	不定	36°	完全に開離	局部的	沖積低地形成
	D	NE-SW, N-S または NW-SE 低角または高角	傾斜移動	垂直	NWW-SEE, NEE-SWW 水平	64°	大部分開離	非常に局部的	↑ ブロック上昇
長沼変動期	C	NNE-SSW 高角	傾斜移動	NWW-SEE 水平	垂直	32°	固結または開離	全域にほぼ均一に分布	↑ 相模層群堆積 陥没盆地形成
	B	NWW-SEE, E-W または, NEE-SWW 高角または垂直	傾斜移動・走向移動 斜交移動	N-S 又は NNW-SSE 水平	不定	32°	固結, 一部開離	局部的	↑ ブロック上昇
	A	NW-SE, NE-SW 低角	傾斜移動	垂直	N-S 水平	69°	完全に固結	ほぼ全域	↑ 褶曲形成